

明治維新百五十年

## 酒と江戸無血開城〈前編〉

作・原口幹朗

その日、龍馬は近江屋の醤油を手土産に京の薩摩屋敷を訪ね、西郷に会うと龍馬は言った。

「西郷さん、こん醤油は、まっこと美味い醤油がやき、ゆくゆくは日の本中に売りたい思うちゆうがじゃ。こ伏見の酒に、長州、土佐の酒もぜよ。それからもう一つ薩摩の焼酎も売りたい思うちゆう。これからは、商いで日の本を大きく変えるがじゃ。」

話を聞いていた西郷が答えた。

「ほう、醤油をな。薩摩ん醤油は甘かどん、京の醤油はまっこと上品な味じゃ。坂本どん、そいは良か。先のバリ万国博覧会で幕府方が出した紀州の醤油が、フランス人にまっこと評判が良かったち聞きもした。こいからは、刀なき世にないもんそ。そんな時は、武士も商いをせんといかん時代ないもす。坂本さあ、そげんなつご道を開いてくんやんせ。そいが出くつとは、おまんさあしかおいもはん」と西郷は言った。

龍馬は、世話になつている近江屋の醤油や諸藩の酒を、海援隊の商いの柱にしたいと考え、薩摩の西郷に相談したのである。土佐の山内容堂は、無類の酒好きで

知られ、大杯を飲み干すその見事な飲みっぷりは、鯨が大海を飲み干すがごとく酒を飲むことから、酔鯨という異名を持っていた。

その山内容堂に伏見の酒を贈ったのも坂本龍馬で、坂本家の本家が造り酒屋の才谷屋でもあることから、土佐の酒を江戸で売りたいという商いの話の手始めに酒を贈ったのである。容堂は、龍馬からの書状を読むと後藤象二郎に命じ龍馬の商いの旨を確かめさせた。容堂は、龍馬の船中八策から大政奉還に順応し、徳川慶喜に進言したこともあり、龍馬の商いの話には藩の財政を潤すことと前向きであった。

その頃、江戸の薩摩藩邸では、徳川慶喜が政権を朝廷に返還したとは言え、尚も実権を握ろうとする徳川方の動向を探っていた。西郷も京と江戸を行き来していたのである。

ある夜、西郷と益満休之助は、芝の増上寺の御成門付近で道に迷い困っていた。ちようと提灯を持った通りがかりの町人が来たので道を探ねた。

「すんもはん、道に迷いました。三田の薩摩屋敷は、どっちでござんそか。」

イラスト：成田安妃子

「そう遠くはございませんが、何分この時間、供の者に案内させますので。」と町人が言う。

「それは申し訳な、俺たちで帰つてもんで道を教えてたもんせ。」と西郷は答えた。「いえいえ、私共はすぐ近くの者でございませぬ、ご心配なきよう。」というので、供の者に西郷と益満を薩摩藩邸まで案内させた。

薩摩屋敷に着くと、西郷は益満に何やら言い渡し奥へ消えた。益満は送り届けてくれた町人に丁寧な礼を言う、名を聞いて土産に薩摩焼酎を持たせたのである。

西郷と益満を薩摩藩邸まで送り届けたのは、麻布狸穴の酒屋の番頭、浅利博之介で、帰るとすぐに主人の膳場秀吉に、丁寧に礼を言われ土産をいただいたことを話した。翌日、膳場秀吉は、土産の礼を言うべく薩摩藩邸に赴いた。門番に事情を伝えるとすぐに中へ通された。すると益満休之助が走って出てきた。

「おう、こいは夕べの膳場さあ、ゆくさおじやいもした(ようこそお越し下さいました)。」と奥へ案内した。すると西郷も出てきて、

「膳場さあ、夕べはまっこと世話にないもうした。」と丁寧に礼を言った。西郷は秀吉をもてなした。秀吉が酒屋を家業としている話になると西郷は大きな目を光らせ、これも何かの縁と、

坂本龍馬が江戸で醤油や酒を売りがついているという話をして、坂本龍馬との間を取り持つという事になった。秀吉は、西郷の頼みとあれば断る理由がないばかりか、西郷の器に惹かれ、この方のお役に立ちたいという気持ちになっていった。それからというもの西郷と秀吉は、薩摩藩邸のすぐ近くにある若松屋という造り酒屋が営む宿屋で、度々酒を酌み交わすようになったのである。この宿屋は、坂本龍馬が密かに江戸入りした時の定宿でもあった。

秀吉は、高い先でもある神田の料理茶屋「おてだま」をよく使っていた。そこで、湯島の筆墨屋「鳩文堂」の主人と飲むことが多かった。いつものように鳩文堂の主人と飲んでいると、会わせたい人がいると言ひ、その場に現われたのは新門辰五郎であった。秀吉は、よく知られた人物にて驚いた。鳩文堂の主人は日頃秀吉のことを話しており、会いたいと言つたのは新門辰五郎の方であった。辰五郎の男気に、秀吉は惹かれていくのを感じていた。それからというもの秀吉は、辰五郎と度々会って酒を酌み交わすようになったのである。その後、辰五郎から隅田川大花火の露天商に酒を納めてほしいという依頼を受けたり、江戸城へ献上する酒の品定めの話を受けるようになり、親交を深めていった。

秀吉は早速京に赴き、近江屋で坂本

龍馬と会った。坂本は、わざわざ京へ出向いてくれた秀吉に、鳥鍋と伏見の酒を用意しててなした。秀吉は、坂本の気さくな人柄に次第に打ち解け酒を酌み交わすうちに、いつの間にか龍馬の魅力に引き込まれていった。

「秀吉さん、この酒はここ伏見の酒で『鮎屋の酒』ちゅう、まっこと美味か酒ぜよ。西郷さんから聞いてちゅう思うが、わしが江戸まで運ぶ酒や醤油を江戸で商つてもらえないらうか。これからこの国は大きく変わるぜよ。古い体制は終わり、新しい時代に生まれ変わるがじゃ。身分に関係なく誰もが国の政に加わり、一人一人が自由に生きていく事ができる世の中になるがやき。わしゃ異国と対等に物を買ひ買ひする貿易でこの国を金持ちにするがじゃ。まっこと新しき国に生まれ変わるぜよ。」と、龍馬は、これからの日の本を語った。

「はい、坂本さま、夢のようなお話ですな。私も新しい時代を担う一人になりとうございます。是非お力添えさせてください。」と返事をした。

龍馬が「今一度、日の本を洗濯するがやき。」と言うと秀吉は、坂本龍馬という人物の大胆さに戸惑いもしたが、人としての魅力に引き込まれていった。

江戸に戻った秀吉は、薩摩屋敷を訪ねて西郷吉之助に坂本龍馬との商いの話が上手く運びそうな事を伝え、礼を

言った。西郷も、「それは、まっことようございもした。」と喜び、薩摩焼酎を酌み交わしたのであった。

しばらくして、江戸の薩摩屋敷に急な知らせが届いた。益満休之助が顔色を変え慌てふためき西郷に伝えた。

「吉之助さあ、吉之助さあ、坂本どんが、坂本どんが。」

「坂本どんが、どげんしたとな。」

「坂本どんが、殺されもした。」

「なんじゃっ、ほんなこつな、惜しかこつした。」と西郷は落胆した。

そして、竜馬の死を惜しみ黙って男泣きする西郷であった。

その事は、秀吉の耳にもすぐに入つた。坂本の死を聞いた秀吉は、龍馬が未来の日の本を語る姿が走馬灯のごとく思い出され、溢れる涙を止める事が出来なかつた。秀吉は、坂本龍馬という計り知れない男に惚れた一人として深い悲しみに落ちていた。

氣力を無くした秀吉を新門辰五郎が呼び出した。酒を酌み交わしていると、今度会わせたいお人がいるので一緒について来て欲しいと言ひ、どなたかと聞くと、勝海舟だと言ひのである。秀吉は驚き、私のような者がお会いするお人ではないと断るが、辰五郎は、心配はいらないと笑いながら話した。

数日後、氷川の勝郎に二人は居た。勝海舟は、二人を迎えた。

「秀吉さんよ、実はおめえさんに直接話したいことがあって、わざわざ来てもらったって訳さ。すまねえ。だがこの相談は、おめえさんでねえと出来ねえ話なのさ。」と勝は言った。

秀吉は不安げな表情で「私のような者が、何のお役に立てましようか。」と返事をした。

「京で坂本と会って来たつてゆうじやねえか。それも西郷の仲介でな。ずいぶん

西郷と親しくしていると聞いて、一つ頼みがあるのよ。」

「私が何を。」と秀吉は言った。

「秀吉さんよ、薩長が江戸へ攻め上つて来るのは聞いていると思うが、何として

も、東征を阻止したいのよ。是が非でも

おめえさんの力を借りてえ。」

「勝さま、私ごときが薩長軍の進軍を阻止するなど、到底出来る話ではござい

ません。」

「秀吉さんよ、今この国は内戦なんぞやつている場合じゃねえ。異国にその隙を突かれちまう。清国の二の舞だけは避けねばならぬ。」

「それで私が何を。」

「西郷に会つてきてもらいてえのよ。会つて話をして来て欲しい。」

「えっ、西郷さまに。」

「山岡鉄舟を遣わすつもりよ。一緒に行つて会つてきて欲しい。」

秀吉は、一介の町人に何が出来ると

思い悩んだ。しかし、ここで逃げるのも卑怯と思ひ、勝の頼みを引き受けることにしたのである。山岡と秀吉は、駿府まで上り、西郷吉之助と面会した。会見は別々に行われた。山岡との話が終わると、

西郷は秀吉を迎えた。

「膳場さま、お元氣そうで安心しもし

た。勝さんから文をもらひ、秀吉さまに

会つて欲しかち、勝さんと知り合ひで

ごわしたか、そいは良か。」と言つた。

「西郷さま、この文を読んでいただけま

せんか。」と秀吉は、思ひのたけを綴つた

手紙を手渡すと、何かと慌ただしいで

しょうからとその場を立ち去ろうとし

た。西郷は、文だけ渡し何も言わず立ち

去ろうとする秀吉に、

「秀吉さま、江戸で困つたときや、薩摩

藩邸に入つたもんせ。」と言つと、

「そういう事ならぬのが一番かと。」

と返した。

西郷は秀吉の文を読むと、その場から動けずいた。秀吉の文には、

「西郷様、お恥ずかしながら年甲斐も

なく女房の他に惚れた女子が出来まし

て、間に挟まれ、いたく辛い思いをして

おります。この方々の事を思うと狂おしい

までの恋慕に苛まれ、胸が苦しく夜も

眠れず辛い日々を過しております。ご

縁があり知り合つた方々ゆえ皆大切な

方ばかり。私は、坂本さまとのお約束を

叶えたい。それには江戸が安泰でなけれ

ば商いは出来ません。坂本さまが蒔いた

種が、これから芽吹こうとしています。

この芽を潰すような事があつてよいので

しょうか。」と綴つた手紙であつた。その

中に、勝からの頼み事であつたという事

は、一切出てこなかつた。

薩長軍の進軍が止むことはなく江戸

に入つてきた。江戸市中は、官軍の総攻

撃の話で、生命の危機とすべてを失う恐

怖と不安の日々で、疎開する者まで出始

めていた。

三月十三日、三田の薩摩藩邸にて、勝

海舟と西郷吉之助の会談が始まつた。

勝は、徳川幕府に全権を委ねられ、決

して妥協を許すことなく強気な態度で

交渉に臨んだ。

西郷も新政府軍の参謀として、徳川

打倒が絶対であつた。

つづく

※の物語はライクシヨであり、事実とは関係ありません。

